もう三年制単独校ではだめ

本宮　啓

私学に国庫支出の道が開かれて以来、私学の存立意義に対する国民的論議の高まる中にあって、国公立学校不足の単なる補完とするがごとき、また大学推薦入学制にすがるのみの存在では早晩その存立は不可能となる。私学に財政援助の強化を求めた中教審の答申に「我国の私学の本領は、建学の精神に基く独特な学風と伝統のもとに特色ある教育を自主的に行ない……」とあるように、その本領の発揮のみが私学存立を意義づけるのである。この観点から同志社の現状をみると、我々の長年の懸命の努力にもかかわらず、その本領発揮は極めて不充分であり、いくつかの要因に強く阻まれていることを痛感する。第一は、

三年制は欠陥制度である

我々の余りにも労多く、実りの少ない現状の主因は三年制という制度上の欠陥にある。

経済同友会は昭和四十四年の教育要求の中で早くもこれを喝破し「現行のように中学、高校各三年では、入学後の一年次と卒業を控えての三年次は、学窓生活が何かと慌ただしいうちに過ぎてしまうので、校風に馴染み、教師との交流を深め、友人との信頼関係を強めるなど、有意義な人間形成を行なうには短かすぎる」ことを指摘し、また中教審第二十三回答申にも「中等教育が中学、高校に分割されていることに伴なう問題を解決するため、これらを一貫した学校として教育を行なうために学制の改革を推進する」方針を打ち出し、**現状では人格形成　能力の開発に不適当**を認めている。

また**三年制単独校は教職員の労働負担が加重**になる。併設校に比べて校務や委員会等の数は同じだけあり、一人当りの負担が過重になり、繁忙と能率低下の原因となっている。

経営的立場からみても、現在国庫助成増額進行中のため、ここ二

ケ年間、授業料値上げがすえ置かれているが、早晩また全国最高級の値上げの再開は必至であり、また国公立校の学級定員が数年で四〇名となり、さらに槇枝委員長の言明のように欧米なみ三五ないし三〇名ともなれば、もはや経済的に対応はできなくなる。

また現在の我校のように一学年八学級の体制は、横に広がりすぎて見通しがきかず、多くの教師が縦割り授業で一部の生徒しか知りえず、宗教教育、生徒指導の徹底や、まとまりのある温かな、敬慕に値する校風の樹立には大きすぎる。以上の諸点からしても、我々が本領を発揮するためには、その**規模を縮少して六年一貫校とする必要**がある。

同志社の一貫教育

従来同志社でこの問題がしばしば論ぜられてきた。しかし三年ごとに外部に出、また入ってくる学生・生徒が相当数ある我が学園の現状では教科的意味での一貫教育には限度があり、むしろ重要なのは精神教育、全人教育、特別教育活動の面での一貫教育である。創立者の精神が生徒・学生の各発達段階に応じて適切に伝えられ、受け入れられ、その応答として自然におこる全学一体の動きが、学園の伝統的精神と雰囲気を形成するまでに育て、高められなければならないが、今日の同志社にはそれを支え、育てる体制がない。昭和二十九年に同志社が総合経済から各校の**独立採算制**に移行したが、これが学園の雰囲気に致命的打撃を与え、その後の大学の量的拡大と相まって、従来の美しい同志社の家族意識、一体感を、教職員の間からも、学生・生徒の間からも急速に冷却させて、**同志社の名称を空疎なものにした主因**となった。

この一体感、同労意識を教職員の間に保つための努力として、同志社時報、新島研究等の出版物、入社式後のキリスト教教育委員会主催の歓迎行事や、教職員修養会（参加者少数）、全交会等がわずかに持たれているが、機会としてはむしろ教職員組合主催の教研集会、親睦行事の方が多くあり、私はこれらはみな、あい働いて益となることを信じて感謝しているが、しかし全体としてはまことに焼石に水の感が深い。このたび創立百年を記念して発足した**新島基金四億円の運営**が、その規約の一部を変更して、もっと現実的、直接的にこの薄れ切った**同志社の再結束と本領発揮の切札**として、有効かつ強力な働きをすることを強く期待する。

一貫教育の第一歩は教職員相互の意志の疎通からで、上野総長が「**人事の交流なくして一貫教育はありえない**」と喝破されたことはさすがにその本質をうがつている。

生徒間において先輩と後輩の結びつきは、その指導力、影響力、信頼感などにおいて絶大なものがあり、とても教師との比ではない。また中高教員の現場の経験と大学教員の専門的立場との相互協力の体制から生れ出る教育的力量は大きく、この生徒相互間、教員相互間の協力から生まれる二つの大きな力、さらには全学一体の協力から生まれ出る力こそ、**一貫教育、私学の本領発揮の力の源泉**だと思う。

さらに一貫教育の特色は、せせこましい三年単位の枠内では到達しえない、より高次なものを追究することができるものでなければならない。文部省は新生日本を文化国家とするため、昭和三十年頃、中学に一管編成の管弦楽を持つことを目標に指導要領を作成し

たが、数年後これを「高嶺の花」としてブラスバンドに変えた。現在有名大学はみなこれを持つことを誇りとしているが、中高の段階でこれを持ちえる学校は全国でもまれで、洛星と同志社がそれである。しかし同志社ではこれについて深刻な問題がある。中学校では昭和五十一年、高校は五十二年に管弦楽部が成立し、香里・女子部の有志を加えて五十三年春に「同志社中高管弦楽団結成記念演奏会」が開かれた。しかしこの名称について高校教員の間に議論が起り、「別々の学校の二つのクラブの合同演奏会であって、一つの管弦楽団が発足したのではない。そのようなものは解散」と生徒を強く指導された。私は三〇年に及ぶジュニアシンホニィの歴史的経過からして、この立場と多少異った感想を持ちながらも、名称のことでもめることを好まず、実体を生かしてゆけばよいと思い、高校と同じ方向で生徒を指導しようとした。しかし一年間にわたる生徒間の白熱の議論の結果「二つの別々の学校のクラブの合同演奏会ではない。そのようなことでは我々が目指しているベートーベン交響曲全曲演奏という大目的を果すことができない。我々はその基盤、土壌の同一性と、先輩が後輩の手をとり、愛情を込めて育て、一体となって切磋琢磨する、その過程にのみ、困難なシンホニィ演奏を可能にする気力とメンタルハーモニーが醸成される」として「名称論議や組織論をさけて実体を生かせばよい」という私の考えを真向から否定し「それは崩壊を意味しますよ」と一致して非常に強い決意を表明した。このことは非常な驚きであり、私の一貫教育に対するいままでの考えの甘さを改めて強く認識させられた。と同時に**生徒は様々な才能の豊かな宝庫**であり、これを適切に引き出せば、本人のため、学校のため、社会のために非常に大きな力となり、益となることを痛感し、宗教教育、生活指導を含めたすべての教育の場で、三年の狭い枠に縛られて近視眼的な指導しかできず、貴い生徒の才能を適切に引き出しえないで**空費した三〇年**もの歳月を思い、慄然たる感を禁じえない。

女子部のクリスマスページェントをみては単独校では到達しえない伝統の重さを感じ、女子大生主導、全学参加のキャンドルサービスに深く感謝をしつつも、それを生み出した、かつての**同志社宗教部（全学園の宗教部であったが独算制により今日の大学宗教部となったために全学的活動が不能になった）**に郷愁を感ずると同時に、独算制と学校間エゴのため、校風を支えリードするような全学的動きや行事を生み出す母体や、同志や同好の士の結束を妨げている現状を、一貫教育の立場に立って強く指摘したい。

中高統合運動の歴史

中高別学と一体制の長所、短所を充分検討の結果、中高統合が絶対に必要であるという結論は昭和二十八年に早くも中学側から提起された。しかし旧制高校の水準を目指し、また大学付属をよしとするなどの高校側との意見の相違や、烈しい反対もあったが、加藤氏が両校校長兼任の立場で努力され、話し合いが進み、翌年には大塚総長も賛同されて、中高統合規約が作られ、わずかながら人事の交流と月一回の合同教員会議が開かれるに至った。しかし当時岩倉移転で経済的苦境にあった高校と肝心の経済統合をさけたため、地域の隔たりと、月一回の合同会議のテンポではせっかくの気運が冷却し、逆に亀裂を深めて、実効をあげることなく数年で崩壊した歴史

がある。

また大学の拡大政策のため、中学校と運動場周辺をめぐる烈しい土地争いが起り、昭和四十一年理事会の「中学岩倉移転の方針」に対して「中高統合のない移転、大学拡大政策の犠牲としての僻地移転」に強く抵抗してきた経緯がある。

むすび

同志社がその本領を発揮するため、過去のいきさつや学校間エゴにとらわれず、新たに発足する国際高校も含めて、適正規模の中高再編成と人事の交流、総合採算制の実現の道を大胆に追求しようではありませんか。同志社諸賢の御意見を期待します。

（中学校教諭・社会）

中学・高校の教育を考える

ぶつかり稽古

―キリスト教と教育の関わり―

田中久雄

一

夏の甲子園の高校野球がいまやさかりである。京都代表の宇治高校は戦わずしてやぶれ去ったが、滋賀代表の比叡山高校は一勝どころか二勝をもあげとうとうベスト8にまで入って気勢をあげた。球児たちの一所懸命な姿を見るのもよいが、私は戦い終った彼らが「校歌」を晴れやかに精一杯歌う姿を見るのが好きである。それにしても彼らが歌う「校歌」のなんと古くさいことよ。「山青く、水清く」ではじまり、きまったように「光かがやくわが学び舎」で終る。古くさいだけでなくおそろしく没個性的である。固有名詞をかえれば、どの学校にも通用するようなものばかりである。はたして今の高校生たちはあれで満足しているのだろうか。甲子園と言う特異な雰囲気の中でこそ歌われるが、普段は忘れられて歌われることもなくなってしまっているのじゃないだろうか。それは、これらの「校歌」の内容がいずれも今の高校生の生活実感からほど遠いこと、

その学校の特色と言うか独自性がはっきりと主張され表現されていないことに原因があると思われる。これは何も「校歌」だけのことにとどまらず、今の高等学校教育が生徒本位のものではなく、その上それぞれの学校の特色を十分に生かしたものになっていないと言うことと関係しているように考えられる。

「生徒本位の教育」――受験と言う仕組みの中にくみ込まれた今の高等学校教育の中で、個々の生徒の持ち味をのばして行こうとすることがどんなにむつかしいことか。また、ともすれば大学へ行くための予備的な段階と考えられがちな高等学校生活に、教師も生徒もどれだけの〈究極的〉な意味あいを見出しているのだろうか。教育が生徒本位のものになっていないと言うことは、今の教育の仕組みの問題と同時に、教育の現場に居合わす者たちの「存在―意識」の問題として改めて問い直さなければならない大切な問題を含んでいるように思われる。

「学校の特色・独自性」――およそ教育目標のはっきりしない教育はあり得ない。よく言われる「建学の精神」と言うものも、私学独自のものではなく、国・公立の学校でもはっきりときめられている。しかし私学においては「建学の精神」をめぐって学校の特色、教育目標が特に熱心に議論されてきたのである。それはその学校の教育目標としての人間像を集約的に述べたものが、いわゆる「建学の精神」だからである。ところが、その議論たるやいつもかみ合わないばかりか、一方的な宣言に終ってしまうことがしばしばである。従って「建学の精神」で学校の独自性を一応主張はするが、その学校でなければならないものがいっこうに具体的に出てこないのである。私学としての存在の意味がきびしく問われようとしている今日、その教育にたずさわる者として、「建学の精神」なるものがはたして今日の状況に十分応え得るものなのか、もし応え得るとしたらそれはどう言う形で具体化されるのか、このあたりを本気で考え、毎日の教育的営みの中で実践して行く必要があるのではないだろうか。

以下において私は主として「建学の精神」をめぐって、キリスト教と教育の関わりの問題に焦点をあてて私見を述べることにする。

二

教育なかんずく同志社が標榜しているキリスト教主義教育と言うものは、「ぶつかり稽古」のようなものだと考えるが如何なものであろうか。相撲で一番大切なものは申し合わせ、ぶつかり稽古である。はじめから体の大きな人ばかりが相撲取りになるのではなく、はじめは小さくても、新弟子は兄弟子の、兄弟子は関取の、関取は横綱・大関の胸をかりてこれにぶっつかり、土俵にたたきつけられて体も大きくなり、一人前の力士になって行くのである。ラグビーの選手の場合もそうである。強い相手とぶっつかり、グラウンドの砂をかんで逞しい選手に成長するのである。同様に教育の現場では、教師は生徒に胸をかしてやることが大切な役目の一つである。特に肉体的な成長と共に、知的・精神的に急速な進歩をとげる高校生の教育にあたっては、知的な素材を媒介とする授業を中心として、学校生活の様々な局面で彼らに胸をかし、多角的にぶつかり合うことが必要となる。そこでは突進してくる生徒を教師が体ごとがっちりと受けとめ、時には突き放し、時には投げとばす真剣勝負の場が開

かれる。勿論みんながみんな突進してくるわけではない。時には名ざしで土俵に呼び出し、こちらから突っかけてその自発性をうながすこともある。教師と生徒との間に知的なものの伝達と同時に、いのちのやりとりがなされる場が高等学校教育の現場なのである。そしてこのことはキリスト教主義教育を考える場合、よけい重要なこととなる。

同志社のキリスト教主義教育を考える場合、新島襄の学校設立の精神が問われるのは当然のことである。本誌でも過去数回にわたって特集をくみ、この問題をとり上げてきた。そこでは新島の教育理念が近代日本の官製的な教育理念との比較においてとり上げられ、ついで「人間普通日用に近き実学」の精神で「鄙事に多能なる」人間をつくり出そうとした福沢諭吉の教育理念との違いが指摘され、新島の独自性が強調されている。また、一八七〇年代のニューイングランドのピューリタニズムの消息が語られ、自由自治を重んじる近代的市民社会の形成を夢みた新島の理想が述べられているのである。従来こうした新島自身の思想原理の解明については労作が多いのであるが、ひとたび新島のえがいた理想が百有余年の歴史的試練をへて今日に至り、今日の状況の下でその理想実現のために私達一人一人が具体的にどうしたらよいのかと言う点になると、ここでも思い切った発言が急に少なくなるのである。

キリスト教と教育とは本来それぞれ次元を異にするものであるが、新島の中ではキリスト教と言う信仰的事柄と、教育と言う文化的事柄とがうまく関わり合い、彼独自の教育理念を形づくっていたのである。しかしこの問題はやがて新島の没後、井上哲次郎の「宗教と教育の衝突」を契機として大きく取り上げられ、遂には教育の中からキリスト教を閉め出そうとする国の方針によって同志社は苦汁をなめることになる。

ところで今日、このキリスト教と教育との関わりの問題は形をかえて再び私たちの決断を迫るものとなってきたのである。それはキリスト教はあった方がよいがべつになくても結構やってゆける学校として同志社が歩みはじめたことによる。言ってみればそれは丁度キリスト教がやどり木として教育と言う幹に寄生しているようなものである。そして普通誰しもが考える「自分は教育をやってさえおればよいのであって、キリスト教のことはその筋の連中にまかせておけばよい」と言うあの考え方がその土壌となっているのである。ここではキリスト教と教育は何ら関わることがない。関わることがないばかりか、教育の中から再びキリスト教が閉め出されようとしているのである。それでは今日、キリスト教と教育とはどう関われればよいのであろうか。

三

キリスト教と言う信仰的事柄が真理探究としての学問・研究・教育に直線的に関わり、干渉するものでないことは言うまでもない。端的に言うならばこの両者はお互いに否定媒介的に関わるのがよいと私は考える。キリスト教によって、ともすれば文化的営みに満足し自己充足的に流れがちな教育の根本が否定的に問われなければならないし、逆にまた、学問の厳密性に本当に耐え得るキリスト教かどうか教育の場でキリスト教そのものが否定的に問われなければならないのである。こうしたことによって教育が教育と言う名にふさ

わしいものとなり、同時にキリスト教もまたその名にふさわしいものとなるのである。そしてこうしたことが絶えず意識的になされる学校が「キリスト教主義学校」なのである。本誌第五〇号で「この世にありながら常にこの世を破り超えるもの、組織に基づきながら常に根底的に組織をすてうるもの、そうした否定的契機を常に生き生きと保ち続けうるところにキリスト教主義学校の本質がある」(女子大・杉瀬教授)と述べられているのもこうしたことであろう。

ところで、「否定媒介」などと言うやっかいな言葉を使うかわりに私は普通「ぶつかり稽古」と言うのである。ぶつかり合う二者はお互いに否定的関係にあるのであって、決してなれ合う間柄であってはならない。しかもこの両者はぶつかり合うことによりお互いが洗い直され、本物になって行く。即ちどちらか一方が既に完成されてしまったものであるのではなく、ぶつかり合うことにより共に完成を目ざすのである。キリスト教と教育の関係もそうだし、教師と生徒の関係もそうである。

教育や学問はどうしても権威主義に陥りやすい。これは自分と自分のつくったものを絶対視しようとする人間の営みの宿命である。同様に、キリスト教もまた制度化したり慣習化したりすることにより独善的に流れやすい。これも文化的生に満足しようとする人間の営みの宿命である。教師も生徒の前にある種の権威として立つ。特にそれが生徒の生殺与奪の権を握るものとして理解されると困ったことになる。生徒は教師の前で次第に小さくなり、顔色をうかがいながら教師に関わることになる。

こうしたことを解決する道を「ぶつかり稽古」に求めるのが、キリスト教主義学校としての同志社の姿であると考えるのである。

(高等学校教諭・キリスト教学)

新島襄関係文献(抄)

"My Younger Days" 同志社校友会
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意—口語改記並原文—」 同志社
(森中章光編)「新島襄書簡集」正・編 同志社校友会
(同志社編)「新島襄書簡集」—岩波文庫 岩波書店
(J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳)「新島襄の生涯」 小学館取扱校友会
「新島先生記念集」 同志社校友会
「明治文学全集第四六巻」
(新島・植村・清沢・綱島集) 筑摩書房
(J. D. DAVIS)「JOSEPH HARDY NEESIMA」 同志社
(森中章光著)「新島襄片鱗集」 丁子屋書店
(森中章光著)「新島先生と徳富蘇峰」 同志社
(森中章光著)「新島襄先生詳年譜」 同志社・同志社校友会
「新島八重子回想録」 同志社大学出版部
(徳富蘇峰著)「新島襄先生」 同志社大学出版部
(魚木忠一著)「新島襄—人と思想」 同志社大学出版部
(岡本清一著)「新島襄」 同志社大学出版部
(同志社社史史料編集所編)「同志社九十年小史」 同志社
(和田洋一著)「新島襄」 日本基督教団出版局
雑誌「新島研究」 同志社新島研究会

最近の中・高生の体力

相良哲視

夏の甲子園の話題と熱気こそ、人々の健康に対する願望と、若さ溢れた体力に対する羨望ではないでしょうか。

最近の中・高生の体力を考えてみる時、甲子園でプレーをしている者を見ても、インターハイに出て来た者を見ても、又、中学生の全国大会に出場している生徒達を見ても、それらの中で、

一、出場選手の体格の素晴らしいこと。
二、記録が毎年更新されていくこと。
三、技術が毎年高度化されていくこと。

等が見られることによって、人々の多くが、最近の中・高生の体力が大いに伸びていると解釈されているようです。このことは、表Ⅰの数字が示すとおり、現在は一年毎に体格が向上していることが分ります。これらの要因として、

一、食生活の向上
二、生活様式の改善
三、公衆衛生の発達

等があげられるでしょう。ところが、表Ⅱから、十年前と体力面の比較は、総体的に向上が見られません。このことは、現場の体育指導者として、大きな課題事項と考えています。一部の者は、選手養成のシステムに載って、健康作りを目指すというよりも、一部の指導者の許で、試合に勝つための努力を日夜続けているが、一方では、受験教育の中で、学校から帰っても塾通いという勉強に追いまくられ身体活動の制限を止むなくされている子が多いのが現状です。このことは、小学生等からも見受けられ、我々の子供の頃を考えてみた時、朝から晩まで遊び回っていた時代と比較すれば、体力養成の面から余りにも可愛いそうに思われます。体育授業の中から、体力を京都方式の三角形式、筋力・敏捷性・持久力の三要素から述べますと、中学一年生の鉄棒けんすいが何回できるかを実施した時、一クラス平均二十名はぶら下がることしかできぬ生徒がいます。二十秒間の反復横とびも、真剣にやってないと思われがちな敏捷力の無い生徒の多さ、持久走も肥満の為や、青白い顔のため途中歩いてしまう生徒の多さ等は、人口増加に伴う住宅事情の密集化、交通戦争といわれる道路事情の危険性も、子供達から、自然環境の中での遊びを奪った要因と言えましょう。

表Ⅰ　本校昭和53・54年の身体計測平均

	身長		体重		胸囲		座高	
	学年平均(cm)		学年平均(kg)		学年平均(cm)		学年平均(cm)	
	S53	S54	S53	S54	S53	S54	S53	S54
中 1	152.1	152.2	43.1	43.7	73.6	74.9	80.6	80.9
2	159.8	159.3	48.6	48.7	77.7	77.2	85.1	83.9
3	164.6	165.2	53.8	55.3	84.3	81.9	86.7	86.9
高 1	168.5	169.2	57.8	58.0	82.1	83.6	89.8	89.3
2	169.4	170.5	59.6	60.3	84.2	85.8	90.1	90.4
3	170.2	170.3	60.6	61.2	84.1	86.6	90.2	90.5

表Ⅱ　本校の昭和45・54年のスポーツテスト学年平均比較表

	種目名	高校1年		高校2年		高校3年	
		S 45	S 54	S 45	S 54	S 45	S 54
体力診断テスト	反復横とび (回)	43.4	42.5	45.3	43.5	45.0	45.4
	垂直とび (cm)	57.4	54.4	60.9	56.8	62.5	57.7
	背筋力 (kg)	126.7	116.8	132.7	128.5	140.5	130.2
	握力 (kg)	36.6	40.3	40.8	43.1	38.4	43.1
	伏臥上体そらし (cm)	58.4	57.6	61.2	62.1	63.2	63.4
	立位体前屈 (cm)	11.7	10.5	14.8	13.9	16.7	18.3
	踏み台昇降運動	65.3	68.0	62.4	67.5	62.3	74.2
	体力診断総合点	22.9	22.5	24.7	26.7	25.3	25.3
運動能力テスト	50m走	7″7	7″6	7″5	7″5	7″5	7″6
	走り幅とび (cm)	413.9	418.9	425.1	427.3	445.3	440.0
	ハンドボール投 (m)	27.6	23.8	28.4	26.0	30.3	26.6
	けんすい (回)	5.9	5.7	6.5	6.5	8.0	11.7
	持久走・1500m	6′13″6	5′56″0	6′07″5	5′52″6	6′06″9	5′53″0
	運動能力総合点	33.7	33.7	41.5	41.8	42.0	42.2

此の夏、私はスウェーデンでの国際体育指導者講習会に参加し、その後デンマーク・ドイツを訪れました。北欧では、冬になると太陽が出ている時間が朝の十一時から、昼の三時までの四時間程という自然環境の中で、国は国民の健康を維持・増進していくために何をしなければならないか、又、国民の一人、一人がいかにして身体活動をしなければならないかを理解していて、人口五千人の割合で一つの体育館を地域に与え、戸外では、芝生のサッカー場・ハンドボールコート等がいたるところに設置され、各区域には、国から手当をもらった上で指導してくれる者がいて、毎日と言っていい程スポーツを生活化しているのが分かりました。ドイツにしても、ゴールデンプランで作りあげた体育施設の豊富さは実に羨ましい程で、そのため、学校体育より、社会体育が普及している現状でした。勿論以上の国々の施設・器具が安全性に留意され、合理的・機能性に富んでいるのは、我国の現状が見る側の人口が多いのに比べて、行なう人口の多さと、健康作りの意義が理解されているからではと思われました。

我国の体育施設が金のかかる民間に頼りがちで、公立的立場からは、学校施設の利用が大きな比重を示めている中で、表Ⅰ・Ⅱを考察するに、中学生の時期こそ第二成長期といって乳児期に次ぐ二番目に著しい体格・体力の伸びる時期であり、ましてや、高校時代は人生最後の発育・発達の時期でもあるのです。これらの世代の体育指導者としての任務は、健康作りの立場から非常に重要な仕事であることは分っているのですが、

一、社会から受験教育をなくし
二、地域に公立体育施設を殖し
三、全生徒に毎日体育授業をやらす

等と非常に理想事項の多い中で考えられることは、幼少の時期から、常に遊びやスポーツに親しむように、家庭での狭い場所でも、簡単で、金のかからぬ可能的なスポーツを見い出し、親から率先して音楽に合わせて体操（ジャズ体操）柔軟・補強運動・縄とびとか、又、なるべく近くの野原や山を歩いたり、登ったり、走ったりする親子の運動機会を多く持つようにし、現状に多く存在している、高い料金を払ってスポーツをしたり、会費を払って週何回と、民間相手に金を使えば、体力が買えると誤解せず、炎天下の戸外で汗をかき、想像性豊かな、土と親しむ、毎日の努力で体力を養う強い子供に育てて欲しく思います。その家庭での姿勢の上に、学校体育が立ち、行政が臨むことこそ、体力作りの理想であろうし、中・高生の時期における体力の差は、大人になって、その子孫へ伝わることを考えれば莫大なものでありましょう。

（香里中高教諭・保健体育）